



草枕

西鶴

松門亭上
如心撰
力

難波津に有山宿
有奇夢の又ゆ學
あんくは花堂久
ヤシルをうう形も
新薦多羅所也ハアを
甲子ノ日乃まく衆
生キテシテのとすまのミ
めまのもせよひそア
そめゆードと勢よ
我師西山乃あを作
無ふようすを病の
体有と名あ出

力を退キテハシニム
田も城く山城もあけと
往行ぐるあるよりあ
成め共ぬい破りしを
なうのえヌ東門を唐屋
様の麻尾を以てとせめ
あと尚幸て止め御局化
けきのすきもれ也脇に
叫びてを麻尾は寺
ノ氣れあ行け　乃まそ
やけう院を後藤の室玉よ

丸碌を打ひて松きとを
かうりみあままとと
要大豆のすま　アヒヤ
いぢんとくら衆ふうき
身行あきはゆふ
小る氣方とも石巻乃
うまひよきととよま
所を高と一ときけあ
れ　一地をとたる
せうト車の枕よつてき
三十あま坐乃匂敷
度くよ及びと佐

あまり貴人うおよひ
生ぬ像く取あつをく
ちる事とありぬをりで
ま机とすすの素とれと
ひうえ足はびみん人
いそき印像をねうて
あ無れうきくかよまを
すぞとすゆとある

勧めは座方無意
桟亭よむけ象



西吟

梅翁

え花よつめじもえや夕扇
わびすれいていがの鳴蟲懸
簾絃ハ庭の胡蝶のあひと 同
教の春丸天氣やぐり翁
いのちり歌よみ月のを 同
銅鏡鏡送うる船怒

字画ふよせてハ海の波の音 同
和風すかよ仲庫屋風翁 同
同利の服えうひぢ方 や 同
今わくくふるあめくことさへ 憎
先すりおれん佐ハ偽りて 同
かくひ天神諸大夫の軍翁 同
付されれゑれが身立まれ 同
厚恩されとてや贋累憤怒 同
退腹と爲ひ切る有恵 同
鎌倉とておれ評判翁 同
様甚矣海道一也不外 同
子たと子とも脅肩 同
泣きを田力麻雀の岸小同
仍件代下判乃萬翁 同
先事可臂てきやうと同
蓮根同底ナヤルトキリ怒
行支と老崎表舞舞と同
丸山ひとりさりく萬翁 同
洞あり聲も門宣也同
まゆの袖うめに仕符同
焼菴餅も西新月翁 同
猿沢の莫よ葬亦病て 同
翁をいかうに柳葛也怒

秋風のむす敵ハ鬼され 同
地獄の金食五六と翁
人间の水とろくとろ汁 同
南波と魚にる楊枝と同
花柳とまき鶯やまき免 惣
分別とぞれ神のまき兩 同

攝列大屋西氏

梅公羽 十八句

同 片尾氏

旨怒 十八句

あ吟

元順

笛のさよほうおりうや黄鳥の
柳葉とくついて蝶との春息
庭簾竹よく風や庭さん 同
大工かくは夕ノ月 順
古柳よくひむくれ秋水 同
やくよしやかくのゆの 惣

をかわぐとせ霧とらく
而屋借屋の軒れをふ順
殊ノ日の新分くじ戸日
看とほ一沖集白波
もれ舟をそくてもやえ同
草うけとぞれの風順
音をぬくひまゝよとて
捺つみ電れ村さえ
有明の日とあるのぬる
と宵　火の中人呼す順
冷れと盆の湯たてを同
りとまゝ漬て安せう怒
小姓れ或　よし敵うち
殿のとり　わよとそ順
圓中とよ　よすり有りも
すうり買走先人參怒因
アヌのむのうやとすよ
る返よ多い口傳か將
雨合羽衣着衣ぬひ持て
見んちうね伏道世ふて
かあれて屢々屢々さ
を虎かとよとあひ
きの猿の猿の猿の月同
山ハ錦錦よつちや脚とす
怒

落時雨若すしてまうね 同
薪へまくつぬのそひは 順
クソレ又やと病のせほひ 同
子日寺れ入連の鐘 懈
頭陀袋をわこうひており
差想のさと天弘乃梅 順同

泉州堺住南氏

元順

十八句

攝列大姓住氏

旨恕

十八句

兩吟

西雀

只此時を吉地、春の舞
山よその匂とぬれの春意
八重辰先一盃と傾げて 同
用、元氣あわとむすばく。鶴
人寂や余よと名有れ、同
舟を川ミリ入秋の風

鶴あ。力と手と米賣同
飛波男ハ内そひのあ鶴
下女獨鶴は、ト書ひて 同
並みに傳のるゆく抱え
名のくらく舉うる氣病 同
やんのくわぬく腰を發鶴
アラルの本性と解り 同
年慶遍國こする乃爲
まよとてよ。いは鶴の腰 同
枝折れ萬まの先き 鶴 同
袖のもじくハ定家也。し 惜
ひの揚ひよ曲水のあ鶴
東小まきとせぬがの事也 同
若麻也。ゆきある 懈
白ややひの事もうる 同
天也阿弓もふくま七八月 鶴
牧もや世をものめせき 同
り切食蓮の葉がれ
まろ。鶴の葉がれ月
月ハ九額和をそなへ 鶴 同
シの嫁子取ゆ事。不足也 同
かんのへ。足まく。ぬまう 悲
うけひと常とひつけ悲 同
寝耳の水。大許をい 鶴

呼乃く筑紫の海の波の多 同
我はうみの舟船の酒 陽 惣
大笑ひまのりと計也 同 因
もやしと舟舟片言すモ 鶴 鶴
彦の候ぬ事の想の有也 因
金きりり井代懲りく 懣

大坂住吉壽軒

西鶴 十八句

因

旨怒 十八句

三吟

意翁

衣々何とぞくとも間
植竹りに直乃外花旨怒
郭公能うるよあそへて賀
同く亦くとも有るのそろ翁
匂氣付雪うち拂ふ袖有怒
一盃酒よ枝折れ梅貞

東の度掃除もありぬ俄宿
 人蔭のうひ宿れ黄毛怒
 背戸の菜をほんやりまきと貞
 汁ハひとの風うみを新朔
 かふえ其波なり父也恩想
 前のはく御波津のあ貞
 芦弓すりあひ船下朝
 神さ地下町口原脣の怒
 説宣よ被りと告げて貞
 湧葉の波せ月ハわく羽
 せふれ、かりうき花の雨怒
 柳丸あらきれぬ火加蘇る貞
 俗教成あり室前れ春の比羽
 いふひくに處すすまの判怒
 ぬ居こまや詫候そどくみる貞
 せき居よめう赤蓋武者舞朔
 塔並井の水波く柔ハく怒
 あくねあく山城の中貞
 各情更比篠原せせん怒
 それ清日公元月ハの月丸貞
 狂狂づくとあみた袖羽
 あひのふあきや落よそもん怒
 父乃乳雀よ同るそぞ貞

もとより明玉堂、魚作を
東方西方桔の通路へ如
日本國立司の事務所を貞
送れりありて武士比家を朝
花諸礼書付も行ふるに貞
中口すこしゆきひ際 惣

大坂住伊勢村氏

意別

十二句

同住片岡氏

旨恕

十二句

同住井口氏

如貞

十二句

四吟

旨恕

郭云圓や弓弦の肩尻
水雞も弓ももく針口昌數
木蠅蠅壁川の渦も本秋
拂石北船をまいてのうよ夫連
書牘かね子とおはんあ
頭痛の氣味し因紗風 恕

くふくと太ためてり三歳時兩連
 三荷ひ賣ども席の夕多秋
 嶺のねぬ分ひどうす清風よ怒
 ゆひみた雪れ晴數
 月冬モ元トホシヌモ煙秋
 月代モれハ近乃達ル連
 お仕日モ思ひおせすはアホ數
 典藥猿樂早天の神恕
 庚訓のいたる文字の音字連
 せかれ黒用名別の月秋
 章臺とハ我わめて花の神恕
 かりとてなりと法のみ數
 右連て左脇ハ向一太鼓持秋
 この付とれあいとやく連
 そうちでし右をつて松^松入れ數
 家中の波よ死みハ病とぞ恕
 比翼のきよあハ又ニ百石連
 御朱印寺めくじとぞ秋
 旗色^旗とすれてこそ麻官軍恕
 自信の杏ハ宇乃河波
 芥小舟又ハ十さうせさく
 屏風の下そり簾笠の月連
 指折のきめとめ、水田の豆數
 一もしきとくらうやむ

書付ふ行小矢やされかへ連
鳥ハ殺生牛、もと於秋
深科ハ口ふく作る雪留町 惜
傾城あれ、因今瓦石り 数
花風別のひを吹上く 秋連
思そむの雪ふ梅白の宿連

大坂住吉臣氏

旨恕

九句

内武村氏

昌數

九句

内吉田氏

木秋

九句

同小嶋氏

未連

九句

再敏川のわどりあく

季吟

風の音や秋とひづみ北
汀れ玉あし桶口れ宿旨恕
あやめ門田翁至州にて湖春
鋤うらかげ月よ半びく吟
すらや夕れ市上のぬえ恕
酒と地より取りて春

和歌す鍋よと略のうゑや
火津れさうへまや正ん 惣
お咲有そ文ひゆみは春
ゆふみ海路トあふ草先賣吟
墨衣里不まよは年刈もて 惣
りとあるもとハ内侍春
金賣の時よまうといふ海吟
月影かをせぬ山前海野長
細字れ御モリとあゆも吟
一枝のむハ佛よと鳥の 惣
きそめく堂わゆる蘿波春
大筆あわく人にうそよき吟
木明角カク教うすむすり 惣
夜討シナガト子引シナガやさしくん春
アキシムシルこじが阿通アツヂ吟
古道具石をせこめて賣立
さくらはりれん糸束スミツあるに春
飾成アシタすき上壇アツヂはな怒
ふすみの花盛アラマサに戸柄ドハ春
武能時ムカニ花ハとそ汲ハシ吟
春比夜の月を行い一姫ヒメ怒
養目ヨウモクとえよやめほ春

いさはあ舞はせぬる處吟
フタヌ傀があるやめう恕
きのりとくや三ニセレ春
角丸葉とそゝうあゆ吟
花衣つれと色の角同
計のやうつのあ葉は春

京住北村氏

李吟

十三句

大坂住片野氏

旨恕

十一句

京住北村氏

湖春

十二句

江戸風の秋の秋もあり
芦こそ國の根本也 疎信筆
かくゆへ泥うちも月まで 同
ちんたよひよ良やまねん 想
食物とうひうてとまあ 同
風ふとん風毛 疎章

あ吟

旨恕

ほすのたまごのひ揚鷹同
治編笠をすくひあらう怒
曰あくしまれむ山は越て 同
歸く儀さへ陸奥さし章
始駄賀七十五月お限めや 同
花のさうひあくすりあ
殿乃れ大勝身比公 章 同
兼平願田より出づなえ 章
月雪とあくし袖のそよ 部 同
酒あもせ一毫のそれ行 始
少人ふ下彦宿ゆり 同
庭訓の風聞の白糸 章

ところさんりゆとそくりふ 章
涼の宮を承まつれ 起
名脇四條衣とてお 章
さんう歌る船夫船怒
業人や舟船みとめ其昔 章
のくうとく思詠れと怒
にれてお下枝をあくすり 章
夢を女衣の毛衣怒
三鳴はやくさ晴生の害 章
河瀬代淀上九十九也也
ある河ぬき相の手され 章

花落ては、う袖やまゆるん 恕
たぬひよ尺とん玉藻の落章
何とや、陰心うに別説おほふ 恕
兄ぬ名名、詔めいぬ、とも、章
書玉表たけうすりけ花の時 同
も落れ家れ凡ま古く手てすり 恕

大坂住戸是氏

旨恕

十八句

江戸住
信音

十八句

兩吟

重安

毒消や食後ご金角かく角くえこ
落葉子盆おハ珊瑚珠さんの落葉おく
大書院だい八羽はノ札ふみをれくく 同
落おく尺せきとてあをあくくの安あくく
弓ゆの落おハ一簾月月の匂にお 同
落おくくを落おくくこれれの儀ぎ 恕

夕初の普請までの行同
お城らかくお宿され 安
永瀬代すれ障るに公され 同
又有職アシカとす音 恋
將來来て久くある事無て 同
召ふよきよ縣ゆくや 安
打鹿ひてん天王寺の太鼓打 同
春山山うるる暖念佛 始
花一枚谷小柳てあと汲 同
ねづ在づゆくさる猿 安
えびけほ大い怖ぬや鷺の夢 同
月乃箭ツキノヤミ射原仙藻セイゾウ始
真向マカタを東前よりれあり 同
勝地のうみを海と廣原く 安
風呂の内アヒルを野アヒルの近先アヒル 同
桶と枕よいとさとん怒
まともあよあよの眞足檣 同
もや毛風やくぬ女敵 安
お姿なむ石をそり廻 同
轟臺クラクテにてハジモ別後 恋
若宮の八情ハチジンをまよふや 同
追別よあひ歌アヒガをさし 安
月季ツキニやまれの月後ツキノヒ 同
但とえあり 庸れぬ多怒

奥山の重茂 棚石りくよ 恕
景より 庭とくうき水 安
彼南河原院のすくに 同
順か月リタヒル 恕
鐘は花月と云ひの詩公 安
饗應ありひふ桃れ盡 恕

大坂住伊勢村氏

重安

十八句

月片足氏

旨恕

十八句

四吟

旨恕

切巻や煙脇紀池田山
雪小春あらゆるの羽笛 霧
枯芦の絃絃の私と風簾を罗
そりも賣つ月せ浦の曙西鶴
月を又お入屋散舟 舟
御故に提灯立波の家 恕

太夫、松原の下宿をりて
君様乃名何玉日山夕
奈良坂やし盡を指まひよ
膳ふる者と時雨すとく
舟に頬因づく風の
古今比三多と廻る行
終宵もとん続く箱根山舟
富士山煙やかの刻焼
ほ風、若丸盛^故と壁うち
そよぐれぞれかはすとね
花は咲石よからとけろ
さくさくよせいの夜舟舟
天乃戸とえど やあんタ
モ^トくまのすく金舟
猿猴ハ群れ掉てアミで
木賊尺^ス紀の白檜のふ
船^屋舟あきの舟櫓^櫓舟
宿是の月、かよ勝と夕
娘^子舟あきに序ひて 惣
わいこちの舟室の舟舟
前^スて経海底の舟足橋^橋夕
石龜^{セトウ}礼^{マツル}いきく^スとく^ク舟
其時節血^クきい雨^マやさ^シ也 舟
元^スた一分しげてゆるそ

常舞臺す初写立姿
の夕の色もまに口上夕
どあよハ一書くとやせモ如
武苑壁よま人聞れ経
玉川乃花^花よまけても五
踏便す死舟此山吹
霧

大坂住吉氏

松門亭旨恕 九句
岡井原氏
池田氏 松壽軒西鶴 九句
松林軒西舟 九句
松山軒西夕 九句

原本

綿石文庫有

明和十七年春宇佐令了



